

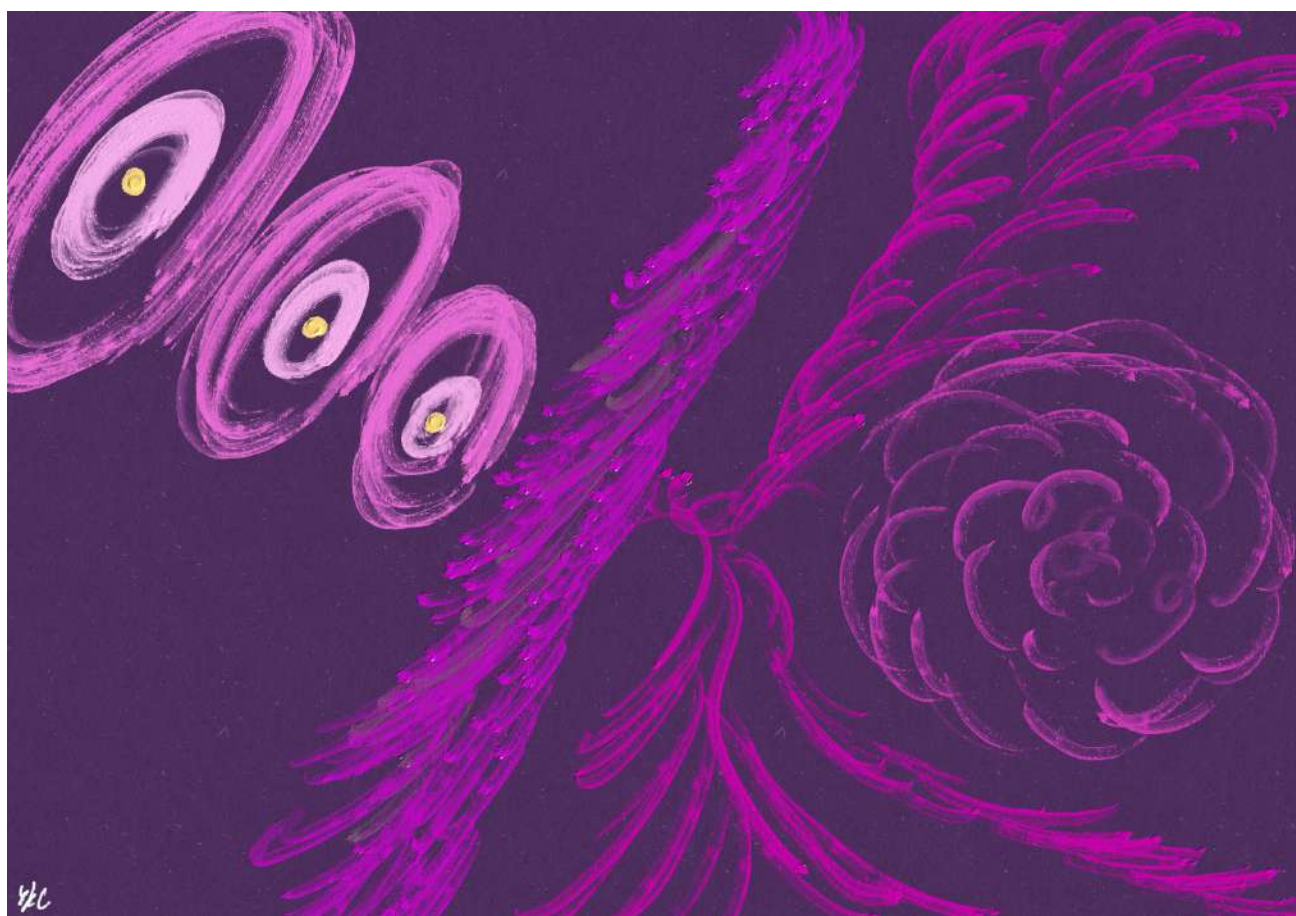
---

# 発達理論の学び舎

Back Number: Vol 307

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」

---



No.1203 変容の香り\_A Scent of Transformation

---

## 目次

- 6121. 人口密度と群衆心理:プライベート空間の確保と自由
- 6122. 病的・未熟な愛/隠れたカリキュラム/ミンコフスキーの時空間モデルとシンクロニシティ
- 6123. 今朝方の夢
- 6124. アウラとヌミノーゼの喪失
- 6125. 秋を迎えたフローニンゲンの朝に
- 6126. 今朝方の夢:悪/社会的現実
- 6127. 本日の雑多な考え事
- 6128. 早朝の雑記
- 6129. まだ見ぬForum Groningen
- 6130. 創作活動と瞑想の意識状態/アマルティア・センの経済思想
- 6131. 精神の彷徨いと狂気さ
- 6132. カードが届いて:異邦人性とマイノリティー性
- 6133. 今朝方の夢
- 6134. ハーグに住む友人の日記を読んで
- 6135. 日常性の再考:遠心分離的な生き方と求心的な生き方
- 6136. 霊性/逸脱者/創作活動における文体について
- 6137. 迷宮を舞台にした今朝方の夢
- 6138. 瞑想・祈りの時間としての入浴
- 6139. シベリウスの共感覚能力/音楽が社会に果たす役割
- 6140. 公私について/制約と不在の不在化

時刻は午後7時半に近づいている。結局今日もまた天気予報が裏切られ、午後には雨が降らなかった。どうやら今夜から雨が降り始めるようだ。その時には雷が伴うらしく、確かに今の空模様を見ると、夕日が出ていながらも雷を落としそうな雲が遠くの方に見えている。

明日は1日中雨のようであり、その時にも雷が伴うことが多いとのことだ。明日終日雨が降ることによって、随分と気温が下がるだろう。実際に明日と明後日は共に、最高気温が22度、最低気温が14度ほどとのことである。ここから大きく秋に向かっていく予感がする。

今日は群衆心理学の書籍を1冊ほど読み終えた。その中で、心理学者のマーティン・コンウェイが興味深い指摘をしていた。それは、人口密度が高い地域の方が群衆心理が醸成されやすいというものだ。そこには物理的な近さと心理的な近さが大きく関係している。

そこから、日本とフィンランドの人口密度は大きな隔たりがあるため、両国において群衆心理がどの程度醸成されているのか、また果たして人口密度が大きい日本の方が本当に群衆心理が醸成されやすいのかを含めて考察をしていきたい。こうした人口密度の問題のみならず、精神的な距離を適度に他者や社会から置けるかどうか、真の自由と結びついているのではないかと考えていた。端的には、真に自由な人間には適切にプライベート空間が守られている。それは物理的・精神的な双方においてである。

SNSを含め、多くの人にとってますますプライベート空間が汚染されているのではないかとという危惧がある。自分のプライベート空間を死守していこうという思い。そして、他者のプライベート空間の侵害に対して働きかけをしていくこと。不自由な人間は、プライベート空間とパブリック空間の適切な区別がなく、それが融合してしまっており、常に他者の視線に晒されている。そこには真の自由は実現されないように思える。

ウィリアム・ジェイムズが指摘するように、私たちは既存の信念に反する体験をするまでは既存の信念を頑なに保持し続けるという性質を持っているがゆえに、多様なコンテキストの中で多様な経験を積み重ねれば、信念体系の変容は起こり得ないことが見えてくる。今の自分も諸々の信念を持っており、それが信念体系として構築されている。それらを絶えず検証し、新たな信念体系へと変容し

---

---

ていくことが発達の1つの側面である。ここからもまた様々なコンテキストの中に身を置き、多様な経験を積んでいくことが求められていることを感じる。フローニンゲン:2020/8/16(日)19:30

#### 6122. 病理的・未熟な愛/隠れたカリキュラム/ミンコフスキーの時空間モデルとシンクロシティ

時刻は午前5時を迎えた。今朝の気象は午前4時半であり、目覚めてみると、深夜に雨が降っていたことがわかった。そのおかげか朝は涼しく、今の気温は18度ほどである。昨日の天気予報では、深夜から今日は夕方までずっと雨のはずだったのだが、この時期の天気は変わりやすいのか、今は雨が降っていない。それどころか、昼まで雨が降らないとのことである。

昨日の日記でも書き留めていたように、今の私は雨を望んでいる。地表を冷まし、完全に秋に移行するための儀式としての雨を欲している。今日の正午過ぎから雷が伴う雨が降るようだが、できれば激しく降って欲しいと思う。

秋の入り口に入ったこともあり、今週1週間のフローニンゲンはまだ随分と涼しい。最高気温は25度を下回り、21度や22度の日もあるぐらいだ。最低気温に関しては15度前後である。これから秋の始まりを味わい、秋の深まりを堪能していこう。1つ1つの季節の中でそれを味わうこと。それは人生を深めていく上で大切だ。

病理的な愛、未熟な愛が引き起こすグローバル規模での様々な悲劇。現代の愛は戦争を無くすどころか、自民族中心主義的かつ利己的なものであり、そうした愛が戦争の引き金になっているという事実。そうした事実を目を向けていた。

トーマス・ホップスはかつて、私たちが犯してしまいがちな認識上の過ちは、善いことを私たちが望むことだと取り違え、悪いことを私たちの欲求を満たさないものだと取り違えてしまうことである、と述べている。善悪の混同というよりも、そもそも善の中で取り違えが起きており、悪の中で取り違えが起きがちなのだ。

昨日もその他に雑多なことを考えていた。認識したものを形にして伝えていくこと責任について考えていた。それは「認識的共有責任」とでも言えるだろうか。ロバート・キーガンの言葉で言えば、物質消費的な文化が私たちに投げかけてくる「隠れた(隠された)カリキュラム」に気づくこと。多くの人が

---

マスメディア・SNS・ニュースの背後にあるそうした隠れたカリキュラムに対してあまりに無自覚なのは、昨日読んだ群衆心理学の観点から色々と説明ができそうだ。隠れたカリキュラムに自覚的になり、それによって引き起こされている心身のコンディショニングから脱却していくこと。それは発達の大切な側面であり、逆に言えばそれが実現されなければ発達はなしえない。

最後に、ここのところやたらと身近でシンクロシティが起こっていることについて、ミンコフスキーの時空間モデルにおいては、2点を結ぶ距離がゼロの経路を常に見つけることができるということから、2人の人間の間でシンクロシティが物理的距離を超えて起こることについて説明できるだろう。私たちの意識は絶えず、時空を超えた何らかの移動が可能なのだ。移動のみならず、おそらく時空を超えた次元において交流も可能なだろう。特に、目には見えないエネルギーにはそうしたことが可能であり、絶えず情報伝達と交流がそこで起こっているのだろう。フローニンゲン:2020/8/17(月)05:30

### 6123. 今朝方の夢

時刻は午前5時半を迎えた。今、空がダークブルーに変わり始めている。その様子を眺めると、今はまだそれほど雲が多くないのかもしれない。そこから天気が変わっていく様子を眺めることや、正午過ぎに雷が伴う雨が降る姿を眺められることを楽しみにしている。

それでは今朝方の夢について振り返り、そこから創作活動と読書に取り掛かろう。今日は午前11時から、「一瞬一生の会」の第4回のクラスがある。早いもので、毎月開催されている全6回のクラスも残りわずかとなった。来月からは第3期の募集も開始され、そこからの自分自身の新たな学びにも期待する。

夢の中で私は、どこか会議室のような場所にいた。そこで、フローニンゲン大学時代のドイツ人の友人のジェレミーと話をしていた。彼と私は協働者のようであり、その場ではジェレミーがクライアント企業に対してサービスの説明をしていた。その説明を受けて私は、彼の説明は少し誤解を与えてしまうように思えた。そのため、ジェレミーが説明を終えた後に、彼を廊下に呼び出し、そこでその件について話をした。私の口調は決して強くなかったのだが、ジェレミーは少し落ち込んでいるようだった。



---

そんなジェレミーの姿を見て、彼の上司が心配して私たちの話に加わって来た。そこで私は、自分がジェレミーのことをどれだけ高く評価しているのかについてまずは話した。実際に、彼と出会った瞬間に、彼の能力と誠実さに感銘を受け、それ以降、彼の能力と誠実さを高く評価していたのだ。それを伝えると、ジェレミーも彼の上司も表情が少し柔らかくなり、そこからまた私の指摘を聞いてくれた。

次の夢の場面では、私はレクチャールームの最前列に座っていた。白人の比較的小柄な若い女性がレクチャーを英語で行っていた。その講師が質問を受け付けた瞬間に、私は真っ先に挙手をして質問をした。私の質問は、ある状況を説明する形容詞群が、1人称的な感覚を引き起こすものと2人称的な感覚を引き起こすという区別があることについて尋ねたものだった。その差異について質問したところ、講師はその質問を理解できていないようだった。私が再度質問をよりわかりやすく説明したところ、後ろの方に座っていた白人の女性がその意図を汲み取ってくれたようだった。自分の中では別にそれほど難しい質問をしたわけではないと思ったのだが、講師の彼女にとってはそれが難しかったようだった。

最後の夢の場面では、私は大きなデパートのエレベーターの前に立っていた。そこで下の階に行くエレベーターがやって来るのを待っていた。自分が今いる階の1つ上の階でエレベーターが止まったので、私は階段で降りた方が早いのではないかと思った。私の横には数人ほどの客がいて、彼らがエレベーターを使うのと、私が階段を使うのとではどちらが早いのかを比較してみようと思った。階段で下の階に到着した時、彼らの方が少しばかり早く到着しており、私は思わず笑った。

その階のフロアをぶらぶらと歩いていると、目の前に2人の若い日本人男性がいた。何やら、彼らは800万円ほどする腕時計の購入を迷っているとのことだった。そのうちの1人が、時計を購入して写真や動画を撮り、その後すぐに時計を売却すれば利益が出るかもしれないというようなことを述べていた。それを聞いて、確かにインスタやYoutubeを活用し、元の時計をある程度の値段で売却することができれば、十分に利益が出るだろうと私も思った。フローニンゲン:2020/8/17(月)05:51

---

## 6124. アウラとヌミノーズの喪失

時刻は午後7時半を迎えようとしている。このところは天気予報が裏切られてばかりであり、今日は結局この時間帯まで雨が降らなかった。一体どうなっているのだろうか？明日は午前中に雨マークが付いているが、この分だとそれもまた怪しい。一応雨が降らなくても数日前から秋の入り口に入ったことにより、涼しくなって来たことは喜ぶべきことである。

自分の言葉は絶えず自分自身を作り、そして新たな自己はまた新たな言葉として姿を現す。言葉はまだこの瞬間には誕生していない自己とつながり、新たな言葉は新たな自己をもたらしながらにして、さらにその先の自己を呼び込んでいく。

今日は朝昼晩と3回に分けて、ホルクハイマーの思想について解説した書物“Max Horkheimer and the Foundations of the Frankfurt School (2011)”を読み進めた。今日は午前4時半に起きたこともあり、読書にも十分な時間を充てることができた。本書の中身を確認すると、初読を終えたのは今から約2年前のことだったようだ。今日は1日をかけて最初から最後まで再読を行った。ホルクハイマーの批判理論からも得ることが大きく、今後も彼の思想を継続的に探究していこうと思う。彼の思想に関する書籍をいくつかまた文献購入リストに入れた。

「多くの人に共有された幻想はリアリティになってしまう」というエーリッヒ・フロムの指摘に付いて考える。まさにそれは今のコロナ下の状況において、形を変えて種々の幻想が1つのリアリティを形成しているように思える。幻想の幻想性を暴き、それを指摘すること。それもまた批判理論の果たす1つ大切な役割である。

ホルクハイマーの書籍を読む中で、ドイツの思想家のヴァルター・ベンヤミンの仕事に遭遇した。ベンヤミンは、傑出した芸術作品を前にした時、人は畏怖や崇敬の念を覚えるとして、その感覚を「アウラ」と述べた。そう言えば、ベンヤミンのこの言葉とすでにどこかで出会っており、過去の日記の中で、「アウラの喪失」という点について書き留めていたように思う。

アウラというのは、ドイツの哲学者・神学者であるルドルフ・オットーの「ヌミノーズ」という言葉に近いものがあるだろう。聖なるもの、そして畏敬の念をどこか喪失してしまっている現代社会。本来、芸術がそうした感覚を私たちにもたらしてくれるはずだが、芸術までもが画一的・消費的な文化に組み込

---

---

まれることによって、そうした感覚を引き起こす力が弱体化してしまっているように思える。芸術の持つ本来の力は、その超越的な力によって、幻想の幻想性を暴くことにも力を貸してくれるはずなのだが、そうした本来の力が弱まっているこの問題に対して、どこから手をつけていけばいいのだろうか。それを考える日々が続くそうである。フローニンゲン:2020/8/17(月)19:37

### 6125. 秋を迎えたフローニンゲンの朝に

時刻は午前6時半を迎えた。今朝、起床したときに、寢室の窓から朝焼けを拝むことができた。それを少しばかり眺め、とても平穏な世界が目の前に広がっていることにどこか心が安らいた。

ここ最近は天気予報が外れてばかりであり、昨夜も結局雨が降らなかった。今日の天気予報も前日から更新されていて、今日は1日を通して随分と雨が降るはずだったのだが、天気予報を見ると、午後3時から1時間ほど小雨が降る程度だという予報が出ている。雨に関しては予報が外れてばかりだが、気温に関しては概ねいつも正しい。今の気温は14度であり、肌寒さを感じる。

昨日から徐々に外の世界と室内の熱が逃げていくのを実感しており、今朝方起床した時には、夏らしさはすっかりとどこかに行ってしまう、秋の感覚が外の世界と室内に広がっていた。室内の熱が逃げたことにより、涼しさを感じられるのは嬉しいことである。明後日は雨が降るようなのだが、その日は29度まで気温が上がる。そこからは気温が下がり、最高気温は22度前後、最低気温は13度前後になるようだ。午後から少し雨が降るようなので、今日は昼前に近所のスーパーに買い物に出かけ、必要なものを購入しておきたい。

孔子の「里仁為美(りじんいび)」という言葉。これは、仁に留まることが美をなすことであるという意味だ。言い換えれば、愛をなすことに住み着いていれば、美をなすことができるということの意味している。逆に、美をなすことに住み着いていれば、愛をなすことができるということも言えないだろうか。

ソクラテスは「哲学とは魂の世話である」と述べている。哲学は自分の魂と他者の魂の世話に資すべきものなのだ。ここのところは哲学者の書籍を読んでばかりである。今日はテオドール・アドルノの“Lectures on Negative Dialectics”を読む。これは随分と昔に購入していた書籍だが、まだほとんど目を通したことがない。中身を開くと、少しだけ書き込みをしている程度であり、実質上、今回が初



---

読だと思っていいかもしれない。ソクラテスの言葉を思い出しながら、こうして日記を綴ることもまた、自分にとっては魂の世話なのだと思う。自分の言葉を綴ることは、魂に養分を与えることなのだ。それを日々実感する。

真正な霊性に基づく実践とは、決して自分に降りかかる苦から逃れるために行うものではなく、苦を生み出す問題の構造そのものに働きかけていくことなのだと思う。霊性とは、基底価値に関わるものであり、その存在者の固有性でもある。また、霊性は内在価値や外在価値に関わるものでもある。そうした観点からすると、霊性の重要性が浮き彫りになってくる。霊性を解放し、それを涵養していく実践。今日もまた自らにそうした実践を課し、集合規模での霊性の解放と涵養の実現に向けて今日の取り組みを前に進めていこう。フローニンゲン:2020/8/18(火)06:58

#### 6126. 今朝方の夢:悪/社会的現実

時刻は午前7時を迎えようとしている。遠くの空に飛行機雲が浮かんでいるのが見える。まだ朝日は照っておらず、今日は少し雲があるので、穏やかな朝日がこれから降り注ぐことになるだろうか。

今朝方は無意識の世界が落ち着いていたようであり、あまり記憶に残る夢を見ていない。起床した瞬間には、確かに何かしらの夢を見ていたという実感があつたのだが、その内容についてはほとんど覚えていない状況だった。かろうじて少しばかり記憶に残っているのは、小学校6年生の時に世話になっていた先生か、高校の倫理の先生が夢の中に出て来ていたことぐらいだろうか。先生と教室で何かについて話をしていた。それは特に真面目な話でもなく、お互いに笑顔を交えて話をしていたように思う。

フロイトの洞察として、人間の意識の中には悪が所与として内在しているというものがある。自分の中に悪性が全くないと言える人はほぼほぼ皆無なのではないかと私も思う一方で、現代はこの悪性を強化するような仕組みが出来上がっていることを危惧する。善性や美性を育てていくような仕組みが不在であることを憂うが、それが不在なのであれば、不在の不在化を行っていくべきであるという方向性が見えてくる。悪があるということは、その対極の善性や美性もすでに不在として存在していて、あとはそれを顕現させるだけなのだ。

---

哲学者のジョン・サールは、私たちの社会は、個々人の志向性には還元できない集合的な志向性 (collective intentionality) によって構築されていると考えている。例えばある対象を「車」として認識するには、その対象が持つ生の現実性 (crude reality) とは別の社会的次元において、車としての機能を与えるプロセスが必要となる。そのプロセスをサールは、“X counts as Y in C” (Xは文脈CにおいてYであると見なす) という志向性の機能だとしている。例えば、この硬貨=Xは、日本=Cにおいて100円=Yだと見なされる、というように。このように社会的な次元で構築される、生の現実性には還元できない現実性を、サールは社会的現実 (social reality) と名づけている。

サールのこの考え方とロイ・バスカーの批判的実在論の考え方を組み合わせて考えてみると、サールが述べている志向性の機能というのは、バスカーでいう“the real”の領域にあるメカニズムのことを指すと捉えていいだろうか。また、サールが述べる社会的現実とは、それを私たちが日常経験することになる点において、“the empirical”の領域であり、同時に経験の1つ上の次元にある出来事の束を司っていることから、それは“the actual”の領域でもあると解釈して良いだろうか。このあたりはまた考えを整理したい。フローニンゲン:2020/8/18(火)07:14

#### 6127. 本日の雑多な考え事

時刻は午後7時半を迎えようとしている。つい先ほど夕食を摂り終え、再び書斎に戻って来た。今、穏やかな夕日がフローニンゲン上空に浮かんでいる。

今日は午後3時半頃に激しい雨が降った。それはほんのいつきのことであったが、雨が降ったことによって、より一層涼しくなったように思う。今日は本当に秋を感じさせてくれる1日だった。短い夏が終わり、もう秋に入ったことを実感する。

ヤスパースが指摘するように、対話は健全な批判精神を養ってくれることにつながりうる。今月と来月には対話を行う機会がいくつもあり、それらの対話の1つ1つがお互いにとっての健全な批判精神を養うことにつながればと思う。批判精神の観点で言えば、今日はパウロ・フレーレの書籍を読み返した。書籍の中で、社会の変容の基礎に、人間を物質ではなく主体としてみなすことの大切さが書かれており、その点について改めて考えていた。変革を志向した現代の諸々の実践は、どうも人

---

がモノ化される傾向が依然として強いように思えてならない。実証的な経済学も許育学も、そこでは個人が単なる統計的な数値に還元されてしまっている様子が見える。

今日はその他にも、アドルノの書籍“Lectures on Negative Dialectics”の再読が終わった。アドルノは、否定する余地がなく、議論する価値のない性質として「陽性 (positivity)」という言葉を使っており、一方で否定する余地があり、議論する価値のある性質として「陰性 (negativity)」という言葉当てていた。そして、思考そのものが陰性であるということについても言及があった。さらには、弁証法的な思考プロセスは陰性に他ならないとも述べていた。それらを読んでいると、やはり先日まで読み進めていたロイ・バスカーの思想ともつながりがあることが見えてくる。アドルノが述べるように、思考そのものが陰性を持った活動であり、思考することはある対象に対して陰性をもたらすことを考えてみると、思考するというのは、バスカーでいうところの「不在の不在化」に他ならないことが見えてくる。

今日はその他にも雑多なことを考えていた。自発的な善意の行為はそれはそれで素晴らしいが、同時に畏怖心を引き起こすような存在、あるいは聖なる存在に見られているという意識から善行をなすというのも大切なはずだということについても考えていた。

現代社会は、畏怖心を引き起こす存在や聖なる存在が不在、あるいは認識的な不在状態に追い込まれてしまっており、人々は自身の霊性をもとに善行をなすことが難しくなっているのかもしれない。畏怖心をもたらす存在や聖なる存在の復権は、アウラの復権に等しい。「アウラ」という言葉を提唱したヴァルター・ベンヤミンの書籍を近々購入しよう。今日は現代貨幣論や貿易戦争に関する書籍を探しており、15冊ほど購入文献リストに加えた。それらは全て経済学に関するものだ。上述したテーマ以外にも、環境経済学 (ecological economics) の書籍が数冊あり、それらの経学書の購入は、来月の初旬にしようかと思う。日本への一時帰国の時期を考え、全ての書籍を受け取ってから日本に戻ることにしたい。フローニンゲン:2020/8/18(火) 19:37

## 6128. 早朝の雑記

時刻は午前5時を迎えた。昨日の午後に激しい雨が少し降ったことにより、気温がさらに下がった印象であり、今朝方起床した時には肌寒く感じた。まだ8月の下旬なのだが、やはりもう秋に入った印

---

象だ。今朝方の起床の感覚をもとにすると、夜に気温が10度前半の時には寝室の窓は閉めて就寝した方が良くように思った。今日は終日晴れのようにあり、最高気温は26度、最低気温は13度と過ごしやすい。

明日は深夜から朝にかけて雨が降るようであり、午後には気温が28度まで上がるようなので暖かい1日となるだろう。今朝の起床は午前4時半過ぎだったのだが、起床した瞬間から腸が運動を始めていて、すぐに活動に迎えるような状態にあった。ここ最近はずつまいもを食べることをやめて、その代わりにブロッコリーやニンジン食べている。どうやらそちらの方が消化がいいようであり、胃腸に負担が少ないようだ。

昨夜も少しばかり考えていたこととして、就寝前にはすでに消化が落ち着いているが、夜の食事はさらにもう少しだけ軽くできそうだった。それはほんの少しではあるが、今日からはいつも食べている中ぐらいのジャガイモを1個ほど減らしてみようと思う。

昨日に続いて今朝方の夢もあまり覚えていない。感情的に中立的なものだった感じがある。攻撃的な夢でもなく、それでいて感動をもたらすようなものでもなかった。場面の印象はとても薄い、日本のどこかにいたような感覚がある。また、日本人の知人が出てきていたような記憶もあり、日本語だけを話していた感じもある。今朝方の夢で覚えていることは、そうした感覚的なものばかりである。夢から具体性が消え、抽象性だけが残った感じである。

それにしてもこの時間帯は少しばかり冷える。半袖半ズボンだと少し寒いぐらいだ。今の気温が13度なのでそれも無理はないかもしれない。今週末の日曜日からは最高気温が20度に満たない日も出てくる。月曜日の最低気温に至ってはもう11度ほどまで下がる。それはかなり寒そうだ。

今日もまた創作活動と読書に打ち込んでいこう。読書の際には、哲学者のアルフレッド・ノース・ホワイトヘッドが指摘しているように、読書で得られた知識が「不活性な知識」になることを避ける。絶えず現実世界への適用を意図し、既存の知識と組み合わせることで実践的な知的体系を構築していこう。

本日の読書は、まずはテオドール・アドルノの“Against Epistemology: A Metacritique”から始めた。こちらはすでに2年前に一読をしているが、内容については対して記憶に残っていない。フッ

---

サールの現象学への建設的な批判を意図して執筆されたものだということぐらいは覚えているが、その観点や論証プロセスについてはほとんど覚えていない。今回の読書では、それらの観点や論証プロセスをより明確にし、さらには既存の認識論への建設的な批判の論点を押さえながら、これまで読んできたロイ・バスカーの哲学思想との関係を考えていきたいと思う。仮に再読が早めに終われば、その流れで、ミシェル・フーコーの“Madness and Civilization: A History of Insanity in the Age of Reason”の再読を行う。こちらの書籍を読むのも2年振りだ。フローニンゲン:2020/8/19(水) 05:32

### 6129. まだ見ぬForum Groningen

時刻は午前5時半を迎えた。空がダークブルーに変わり始めたが、辺りはまだまだ暗い。それでいて気温も低い。秋の訪れを肌身に感じる。それは自分が待ち望んでいたものなので、こうした肌寒さを感じられることを有り難く思う。寒さが自分の背筋を正し、精神的筋力をたくましいものにしてくれることを実感する。

来月の初旬にハーグの友人がフローニンゲンを訪れることになり、友人と一緒にランチを食べることにしている。それに伴って、ランチは昨年にしたForum Groningenという大型施設のレストランにするか、それとも街中のオーガニックレストランにするかを考えていた。Forum Groningenにはカフェもあるため、レストランは街中のものにしてもいいかもしれない。

Forum Groningenという施設の工事が始まったのは2012年であり、私がフローニンゲンにやってくるよりも随分と前だ。そしてこの施設が完成したのは今年の2019年であり、工事の着手から完成まで7年の歳月を要していたことを改めて知る。時間をかけてゆっくと作り上げていくこと。Forum Groningenはまだ訪れたことはないのだが、来月ここに足を運ぶことによって、時間をかけて何かを作り上げていくことの大切さを改めて感じることになるだろう。

Forum Groningenは街の中心部にあって、それは高さ的にもデザインの的にも目立つ建物のはずなのだが、足を運んだことがないだけではなく、実はまだ認識したことすらない。これは笑えてしまう事実だ。というのも、私は少なくとも週に1回は街の中心部のオーガニックスーパーに足を運んでお



---

り、Forum Groningenは街のシンボルでもあるマルティニ塔のすぐ近くにあるので、その存在感は強いはずだからだ。

人間とは面白いもので、関心がないとそれが目に入らなくなるという性質を持っている。私にとってForum Groningenは認識上の盲点になっていて、工事の完成から1年が経つが、まだこの目でまじまじと見たことがない——私は工事が行われていたことすらも知らず、そもそもこの施設が存在することを教えてくれたのはハーグに住むその友人だった——。この日記を書くことによって、近々街の中心部を訪れる際には、この建物を認識することになるだろう。この1件は、認識論と存在論に関わる1つのエピソードになった。

今朝方はほとんど夢を覚えていなかったが、ふと、昨日の仮眠中の体験を思い出した。いつものことではあるが、仮眠を取るためにベッドの上に仰向けになると、意識がすぐに深みに到達する。夢を見ない深い眠りの状態、つまりコーザル意識へと移行することがとても速やかなのだ。そして、そこで深い治癒が行われていることをいつも実感する。

昨日は改めて、仮眠の効能について考えていた。自分にとっては、仮眠は瞑想以上に深い意識状態に到達させてくれる瞑想実践のようなものであり、それでいて深い治癒がなされるという効果もある。

明晰な意識をコーザルの意識状態で保っておくことはまだできないが、それを意識しておけば、いつかそうしたことが可能になるのかもしれない。今日の午後の仮眠中の体験がどのようなものか、また1つ楽しみだ。日常の何気ない事柄が楽しみになること。それは人生を充実した形で豊かに送るためにとっても大切なことだろう。フローニンゲン:2020/8/19(水)06:04

### 6130. 創作活動と瞑想の意識状態/アマルティア・センの経済思想

時刻は午後2時半を迎えた。今は太陽の光が照っていて、暖かさを感じる。今朝は起床してから昼ごろまで肌寒い時間帯が続き、長ズボンを履いて過ごそうかと迷っていたぐらいだった。秋を迎えたフローニンゲンにおいて、朝夕はとても涼しくなり、日中はまだ暖かい時間がある。徐々に秋の気候に慣れていこう。

---

ここで少しばかり今日のこれまでの実践について振り返りたい。早朝一番の作曲実践は、曲の原型モデルを用いて、音楽パズルを解くかのように感覚的に原型モデルをもとにして曲を作っていた。原型モデルをもとに曲を作ることは、その時の自分の感覚に合うようなパズルを解いていく楽しさがある。その時の感覚を構成する微細な要素がパズルのピースとなり、それらをうまく組み合わせると感覚の全体像となる。

そこからふと、作曲実践や絵画を描いている時には、明らかに日記を執筆している時とは異なる認知機能が働いている改めて気づいた。後者は当然ながら言語分析的な認知が働いており、前者はより純粹な認知が働いている。どちらの認知も出発地点は意識の未分化な領域であり、そこから機能は異なれど、両者共に形を生み出すという点で分節的な機能を果たし、形を生み出していく点は共通している。また、作曲実践や絵画を描いている時は、雑念に囚われず、イメージや感覚が思いのままに任せた瞑想中の意識状態のようになることも興味深い。創作活動は、形を生み出す瞑想実践と言えるだろうか。

午前中の読書をきっかけにして、経済学者のアマルティア・センの潜在能力アプローチについて調べていた。センは能力を評価する際に、「資源を価値ある活動に変換する能力は、個人によって違う」という点を1つの要素として挙げている。これは当たり前のことのように思えるかもしれないが、この要素はとても重要に思える。なぜなら、この評価基準に見合わない形で能力評価や教育が施され、本来個人が自分の関心や資質に合致した価値ある活動に変換していくべき資源が、社会が構築した1つの方向性や活動に振り向けられるような見えない力が絶えず存在しているからである。

例えば、現代人の多くが能力と時間という貴重な資源をカネを稼ぐ活動に疑いもなしに振り向けていることなどが挙げられる。さらには、人の厚生を評価する上で、物質的なものと非物質的なもののバランスが大切だというセンの私的にも共感する。非物質的なものとして、美や善、さらには霊性のようなものを含め、様々なものがあるが、そうした目には見えない非物質的なものへ眼差しを向けることを経済学者のセンが強調している点は感銘を受ける。

その他にもセンは、教育の改善と国民の健康における改善は、経済成長を実現させるための経済改革に先行して実現されないければならない主張しており、これには大いに共感する。だが同時に、教育と国民の健康に資する経済改革を行うことも重要だとも思う。単に経済成長を実現させる

---

ための経済改革ではなく、教育や国民の健康、さらには美意識・善意識、そして霊性を涵養するような経済改革を実現することができればどれほど理想的だろうか。そのようなことについてぼんやりと考え事をし、センの書籍を3冊ほど今月の文献購入リストに入れた。フローニンゲン:2020/8/19  
(水)14:41

### 6131. 精神の彷徨いと狂気さ

時刻は午後7時半に近づいてきている。今日はこの時間帯に雲が空を覆っていて、夕日が地上に降り注いでいない。遠くの空の方はかすかに晴れていて、その辺りが夕日に照らされている。

今日もまた自分の取り組みに存分に打ち込むような1日だった。今朝は午前4時半過ぎに起床したこともあり、午前中の時間を十分に活用することができ、午後も午前中と同じぐらいに集中力を持った取り組みができていた。

自分の人生を絶えず内省し、何を通じてこの世界に貢献していくのかを考えながら日々生きていけば、常に新たな学習領域や実践領域が見つかるのではないかという点について今日もまた考えていた。この10年間で振り返って、自分の学習領域や実践領域が変遷していく姿を眺めていると、それらがそうして変化してくことがとても自然に思えた。自分が変化していれば、学習領域や実践領域が変化して然るべきだ。当然ながらそれは、過去の学習領域や実践領域を捨て去るわけではなく、まさに超えて含んでいくことが大切なのだ。

今日は、テオドール・アドルノとミシェル・フーコーの2冊の書籍の再読を終えた。明日は、“The Good Society and the Inner World: Psychoanalysis, Politics and Culture”という書籍を読み進めていく。こちらの書籍は今回が初読となるが、巻末の参照文献リストを眺めてみたところ、ロイ・バスカーやヨルゲン・ハーバマスを含めて、ここ最近読んでいた書籍が掲載されていた。このあたりにも関心の輪のつながりと拡大を実感する。

偉大な芸術作品は、彷徨える精神に安住の空間を提供することができるかもしれない。フーコーは、不規則に彷徨う精神を狂気さの現れだとした。現代人の精神が彷徨っているように思える現在の状況を考えると、今はまさに狂気な時代なのかもしれない。狂気さを癒す芸術作品の出現と普及について思いを馳せる。

---

昨日も、芸術作品の果たす本質的な役割の1つについて言及していたように思う。精神に安息を与え、精神が本来の動きを取り戻すことに寄与することもまた芸術作品が本来果たすべき役割の1つなのだろう。

その他にもフーコーの興味深い指摘として、「誤った学習の蓄積は、狂気に至る」というものがある。教育と大衆化は歴然として異なる。大衆化はされているが教育はほとんどされていない現代人。

自己の内側から外側に向かって花開いていく過程の中で自発的に起こる学習の欠落とそうした学習の抑制。それが大衆化と相まって行われており、それは人々を誤った学習に仕向け、結果として現代人の精神は当てもなく彷徨い、狂気さを身に纏うことになる。遠くの空に向かって動いていく気球を眺めながらそのようなことを考えていた。フローニンゲン:2020/8/19(水) 19:38

### 6132. カードが届いて:異邦人性とマイノリティー性

時刻は午後6時に近づこうとしている。今、空がゆっくりとダークブルーに変わり始めている。通りの街灯が静かに輝く姿を見つめている。

今この瞬間の気温は21度と少しばかり肌寒く、ここから午前9時に向けて20度まで下がり、そこから気温が上がっていくようだ。今日の最高気温は28度のことであるから、日中は暖かさを感じられるだろう。今日は午前中に小雨が降るようであり、午後からは天気が回復する。昨日、クレジットカードとプライオリティーパスが日本より無事に到着した。ひとまずクレジットカードを入手できたので、近々街の中心部の革製品専門店で足を運び、財布を購入したい。

ちょうど今日は午後から天気が回復するようなので、今日の午後にでも散歩がてら財布を購入しに行ってもいいかもしれない。一方で、財布を持って外に出かける機会がほとんどないことを考えると、来週でもいいように思える。近所のスーパーに行く時はいつも、銀行のデビットカードをビニール袋にくるめ、それをポケットに入れて持っていくだけである。財布を使うのは髪を切りに行ったり、街から離れるような外出をする時ぐらいだ。

今日は午後に、昨日に引き続いて音声ファイルの作成をしたいと考えていたこともあり、財布の購入はやはり来週に回そう。天気予報を見ると、来週はもう完全に秋の気候になっている。今日と明

---

日は気温が27度を超えるが、明後日からはもう軒並み最高気温が20度前後となり、最低気温は10度を少し超えるぐらいなので、それはもう秋の気温である。財布の購入は来週の晴れた日にしようと思う。一方で、クレジットカードの到着をもって、今週末に書籍の一括注文をしようと思う。今のところ、今月は30冊ほど目星の書籍を購入しようと思っている。それらの書籍については今後言及することもあるだろうから、実際に購入した際には、どのような書籍を購入したのかのリストを書き留めておこう。

そう言えばアテネ旅行の際に、自分がそれほど異邦人性を感じなかったことについて昨日思い出していた。異邦人かつマイノリティーである生活を8年間ほど続けてきたことによって、その状態が自分の中で日常になっているようだ。また私は、自分のそうした異邦人性やマイノリティー性を大切にしたいと思っているようなのだ。なぜなら、人は誰も本質的には固有な存在であり、それゆえにマイノリティー性を絶えず内包していて、それがこの世界に多様性をもたらすからである。

画一化を強いる社会の力に対抗する意味でも、自身のマイノリティー性を大切に、それを育てていきたいとすら思う。一方で、マイノリティーを排斥するような運動や圧力に対しては、然るべき関与をしていきたいと思う。

自己の中にある異邦人性やマイノリティー性について考えていると、自分は一度誰でもない者(nobody)から何者(somebody)かになり、今の自分は再び誰でもない者に向かって歩いているのではないかと思った。何者かであろうとすること、そこに固執することから解放され、何者でもない者として自己に安住し始めている自分がある。ここからゆっくりと、何者でもないものへ向かっていくプロセスがさらに進行していこう。フローニンゲン:2020/8/20(木)06:08

### 6133. 今朝方の夢

時刻が午前6時を迎えたところで、少しばかり小雨が降り始めた。天気予報によると、今から2時間ぐらい小雨が降り続けるようだ。一昨日と昨日は、記憶に残るような夢を見ていなかったが、今朝方は記憶に残る夢を見ていた。それらについて書き留め、今日もまた午前中の創作活動と読書に励んでいきたい。



---

夢の中で私は、元サッカー日本代表の2人の選手と一緒にサッカーグラウンドにいて、そこで変わった遊びを一緒に行っていた。その遊びとは、コーナーキックのライン上の中間にボールを置き、そこからゴールと並行に体を向けてボールを蹴って、遠いサイドネットに入れる遊びである。遠いサイドネットにボールを入れるためにはかなりの技術が要求された。

まず最初に、2人のうち、若い方の選手が先行してボールを蹴った。うまくゴールに入ったと思ったら、手前側のサイドネットだった。それは成功にならず、その選手は笑いながらも悔しそうにしていた。今度は、歴代の日本代表でも傑出してキックの技術の高かった選手が蹴ったところ、見事に遠い方のサイドネットにボールが転がっていった。それを見て、やはりさすがだと思った。今度は自分の番がやってきて、いざボールを蹴ろうとしたところで夢の場面が変わった。実際のところは、2人の選手と和気藹々といろいろな話をグラウンド上で行っていたように思う。年配の選手の方からは、今度家族ぐるみで食事でもどうかと誘われたのを覚えている。

次の夢の場面では、私はフットサルコートの上にあった。大学時代のフットサルサークルの仲間やフットサル以外で知り合った大学の友人たちと一緒にフットサルを行うことになっていた。対戦相手には小中高時代の友人たちが多くいて、彼らのプレースタイルを知っている私としてはとてもやりやすそう思えた。ひょっとしたらそれと同じことを相手も思っていたのかもしれない。

試合前に円陣を組もうとしてコートに向かったところ、こちらのチームはなぜか全員が水色の服を着ていた。とても統一感があっていいと思ったが、そこに小中高時代の友人(HY)がこちらのチームに加わることになり、彼は赤い服を着ていたので、せっかくの統一感が崩れると思ったが、彼はゴールキーパーだったので、1人だけ違う色の服を着ていることは逆に好都合であった。

そこから円陣を組んでいざ試合が始まった。試合開始直後から、お互いに点を取り合うことになった。正直なところ、メンバーの技術からしてみたら、こちらの方が上手いメンバーが揃っていて、試合は一方的なものになるのではないかと予想していたので、その予想が裏切られる形となった。だが、拮抗している方が試合としては面白かったので、私はその状況を楽しむことにした。

相手のゴールキーパーは小柄でキーパーの技術が高くない友人(YU)だったので、自分はどこでもボールを受けたらとにかくシュートを打つことにしていた。それが功を奏して、結構得点が入った。

---

得点は比較的簡単に入るが、一方で失点も多いことがやはり気になり、守備に関して、マンツーマンでいくのかゾーンでいくのかをチームのリーダーである元プロフットサル選手の人に聞いたところ、「マンツーマンとゾーンのミックス版でいこう」と言われて、逆にどうやって守ったらいいのかわからなかった。今朝方はそのような夢を見ていた。上記2つの夢以外にも、その他にもう1つ重要な場面があったように思う。そこでは日本人女性と話をしていたことを覚えている。その話は意外とお互いにとって大切なことだったように思う。フローニンゲン:2020/8/20(木)06:29

#### 6134. ハーグに住む友人の日記を読んで

時刻は午前8時を迎えようとしている。今、フローニンゲン上空の空は曇っていて、肌寒い。先ほど小雨がぱらついてきたが、今はそれが止んだ。1時間弱前に洗濯機を回しており、この日記を書き終えるぐらいがちょうど洗濯機が止まる頃かと思う。

フローニンゲンはめっきり涼しくなり、昨夜はもう寝室の窓を開けて寝れないほどになった。おそらく窓を開けて寝れないことはないのだが、窓を開けて寝てしまうと体が冷えてしまうと思ったのだ。短い夏が終わり、これから秋が徐々に深まっていくことについて思いを馳せる。

そんな中、いつものように早朝の味噌汁を飲みながら、ハーグに住む友人の日記を読んでいた。友人は、先日アテネでの財布の紛失の際に私を助けてくれた恩人である。恩人でもある彼女の日記はいつも面白い。日記の中に友人の洞察や内なる声が含まれている点における面白さもあり、同時に自分とは異なる人間の異なる人生模様が描かれている点も面白い。また、同じオランダで生活していながらも、オランダの気候に対する受け止め方が違っていたり、それによって生活スタイルが異なっていることがわかって面白い。

フローニンゲンも、ハーグに負けじと7日間ぐらい猛暑日が続いていた。そんな中でも私は即座に暑さに適応し、普段と全く変わらないリズムと質で自分の取り組みを続けていた。一方、ハーグに住む友人の日記を読むと、どうやら随分と暑さに参っている様子が伝わってきた。笑っては不謹慎なのだが、友人が随分と「ぐったり、ぐっしょり、ぐっしょり」している様子が文体から伝わってきて、思わず笑顔になってしまった。

---

今回の夏の体験を経て、個人的には32度と33度の間にある明確な体感上の違いを掴み、33度を超えると、確かに暑くて参りそうになるのはわかる。その点にはとても共感する。しかしながら、33度を超えても、その外部の状態に速やかに内的感覚や身体機能が適応するような形で、そのような高温の状態であっても普段と変わらずに私は生活を送っていた。

先日の日記で書き留めていたように、結局今年の夏が終わった後に倉庫にしまっていた扇風機の存在に気づき、夏の置き土産として残った部屋の熱を逃すために扇風機を使っただけであった。部屋にクーラーもなく、扇風機もないので、当然ながら窓を開けて暑さを凌いでいたのだが、オランダの家の窓には網戸がないので、窓を全開にしてしまうと虫や小鳥が入ってきてしまう。そうしたことから、窓を開けるのは最小限であった。

それではどのように暑さをやり過ごしていたかというと、下の下着だけは着用していたが、上は全裸であった。端的には、服を着ることそのものを疑い、そして裸でいることがもたらすちょっとした違和感が社会文化的に構築されたものであることに気づき、それらの違和感から解放される形で7日間は裸で過ごすことが多かった。上半身裸になることを躊躇う人もいるかもしれないが、その躊躇いの所在がどこかを突き止めることがなければ、真の解放はもたらされないだろうということを考えていた。数日前にも、「一瞬一生の会」の音声ファイルの中で、私はこの1年間ぐらい、石鹸やシャンプーを用いて体や髪を洗っていないことについて言及していた。

その中で、「仮に友人が惰性で足を石鹸で洗っていたら、ひどく憂う」ということを述べていたことを思い出した。足を洗わなければならないという思い込みや、足を洗わなければ臭くなってしまうという思い込みを検証することの大切さを説明し、そもそも足を洗わなければ足が臭くなってしまう生活習慣そのものがおかしいのではないか？ということも述べていたように思う。

足が汚れたから足を洗うというのは、シングルループアプローチのように対処療法的であり、足が汚れてしまう真の要因は何なのかを考えることによって足が汚れなくすることがダブルループ的なアプローチである、ということを含め、「足を惰性で洗う人を心配してしまい、そうした人には真の解放はもたらされないであろう」ということを45分ほど1人で説明していた。足を洗うというのはとても卑近な例だが、重要なことは悪き習慣からの脱却であり、自分の習慣が自らを制限するような社会文化的に構築されたものでないかどうかの検証をすることが大切だということを伝えようとしていた。

---

人は無意識的に、社会や文化から刷り込まれた行動を習慣にしてしまうのだ。足を石鹸で洗うということもまた文化的な産物であり、例えば江戸時代においては、石鹸などで足を洗うことなどなかったであろう。今の私と同じように、体の汚れは全て浴槽に浸かる形で落としていたはずだ。そのようなことを考えながら友人の日記を読んでいた。

暑さを凌ぐための工夫は様々あるだろうが、1つには単純に服を着ないというものがあるだろう。そして、身体を冷ましてくれるような食材、とりわけ水分豊富な夏野菜や夏の果物を摂取するというものもあるだろう。正直なところ、自分の内側の芯の部分に確固とした生活リズムの軸が構築されていれば、外部環境がどのように変化しても、軸がそうした変化に速やかに適応してくれるように思う。根っ子としての軸を持つことができれば、外部環境の変化は根っこを脅かすものではなく、単に葉を揺らすだけのものに過ぎないことが見えてくるし、それが実感される。

友人はこの猛暑の期間、自宅から外には出ず、家でゆっくりとしたり、寝て暑さを凌いでいるということを書いていた。そこでふと、そう言えば、友人は寒さがあまり好きではなく、冬の時期は特に家から外に出ないということを書いていたことを思い出した。

オランダは冬が長く、春と秋も夏と同じぐらいに短い。春の陽気として少し暖かくなったなと思ったら、そこからいきなり夏がやってきて、すぐにその夏もどこかに行き、秋がやってくる。秋がやってきたと思ったら、そこからはすぐにジャケットやコートが必要な時期がやってくる。そのようなことを考えていると、来月の初旬に友人がフローニンゲンにやって来てくれることがどれほど有り難いことかわかった。それは滅多なことなのだ。

ここでも少し笑みを浮かべながら、冬においては自宅の外に出ず、夏においても自宅の外に出ないのであれば、一体友人はいつ外に出ているのだろうか？と思ったのである。冬眠だけではなく、夏眠をしていた友人が、この短い秋のある日にフローニンゲンに足を運んでくれること。それは滅多にないことなのだ。

私がアテネで窮地にいるときに、その友人は私を救ってくれ、そのときに私は、「神様、仏様、OO（友人の名前）様」と読んでお礼を伝えた。そんな友人も見方を変えれば、滅多に姿を見ることのできないネッシーのような存在であると思ってしまう、来月フローニンゲンの駅に迎えに行くときに友

---

人の姿を見つけたら、「あっ、長き眠りから覚めたネッシーだ！」と心の中で思ってしまいうに違いない。フローニンゲン:2020/8/20(木)08:31

### 6135. 日常性の再考:遠心分離的な生き方と求心的な生き方

時刻は午後7時半を迎えた。今、優しい夕日が西の空に見える。すっかり秋を感じさせてくれる1日を今日もまた充実した形で過ごしていた。今日の読書について言えば、“The Good Society and the Inner World: Psychoanalysis, Politics and Culture”に加えて、“Hegel, Heidegger, and Man-Made Mass Death”の再読もした。明日からはしばらく美学書を読もうかと思う。

ちょうど一昨日に引っ張り出して来た美学書の中から、明日はまず“Aesthetics: An Introduction to the Philosophy of Art”から取り掛かろう。ちょうど今週末に書籍の一括注文を考えていて、その際にも美学関係の書籍を購入する。それらの書籍が届く前に、一通り手持ちの美学書を読み進めていく。

ちょうど先ほど夕食を摂り終え、今は少し体温が上がっているようだ。いつも食事の後には体温の上昇を感じる。今日の午前中、トイレの室内の温度に反応して自動で暖房が付き始めていることに気づいた。つい先日まで猛暑日であったことを考えると、それは信じられない。そもそもまだ8月なのだ。トイレに勝手に暖房が入るようになったことを見ると、本当に秋がやって来たことを実感する。

今日もまた雑多なことを考えていた。1つには、全てを幻想と片付けてしまうこともまた、ある種の還元主義的発想であるというものだ。それは極端な観念主義であり、实在論的な観点が欠落しているばかりか、「全ては幻想である」という発想そのものもまた幻想であるという主張がそこに内包されていることにも気づけていないという認識上の罣もある。

そのようなことを考えていた後に、ハイデガーが述べていたことに考えが向かった。ハイデガーが述べるように、自己の存在が日常性を通じて実感されるものであれば、日常性が脅かされるというのは自己の存在を脅かされることに他ならず、それは実存的な危機や病理をもたらす恐れがあるのではないか。そして、昨今に始まったわけではないが、日常が脅かされる異常な事態で溢れる現代社会の状況について考えを巡らせないわけにはいかなかった。また、「日常の有り難みを感じる」というのは、ひょっとすると、それを述べる人はそれまで日常から乖離して生活を営んでいたことを暗に示



---

しているのではないだろうか。そうした感覚が得られることは肯定的に捉えられがちだが、日常性を絶えず感じられていなかったという異常な事態に着目すべきなのではないかと思う。日常が日常として絶えず今ここにはないから、ふとした時に日常を感じ、その有り難さを感じるという奇妙な現象が起きている。

遠心分離してしまっている自己。言葉が自己という中心点から離れ、遠心分離的な言葉が散乱していることについても考えていた。リルケが述べる「賢明な軌跡」というのは、絶えず求心的な形でこの瞬間を生きていくあり方のように思える。自己が中心点から離れず、全てはその中心点を起点にして回っているという感覚。流れに身を任せて生きるというのは、決して自己が中心から離れる形での遠心分離的な形ではなく、それは絶えず求心的な形でなされるものなのではないだろうか。そうであれば、自己は自己と分離してしまい、自己は世界と分離してしまう。フローニンゲン:2020/8/20 (木) 19:47

#### 6136. 霊性/逸脱者/創作活動における文体について

時刻は午前6時半を迎えようとしている。数時間前に小雨を降らせた雲がまだ少し残っているが、今は雨が降っていない。ここから天気が回復し、今日も1日を通じて天気が良いようだ。今日は27度まで気温が上がるようなので、日中は暖かさを感じられるだろう。明日からはもう20度前後の日々となり、来週は軒並み20度を下回るような日々が続く。

昨日に考えていた雑多なことを昨夜日記に書き留めていたが、その他にもいくつか考えていることがあった。その1つとして、本来霊性を育むことまで射程に入れたものが教育だったはずなのだが、今となっては霊性を育むような教育がなされていないだけでなく、トラウマや不自由さを得るために学校に行っているのではと思われることについて考えていた。本来の目的から逸脱し、その逸脱が人間を蝕んでいく教育に成り果てている姿を見て、ここにもまた関与の余地が多分にあると感じた。

2つ目として、この宇宙は逸脱者やバグを生じさせることによって調和を保っているのかもしれないということについて考えていた。つまり、絶えず不完全状態を維持することによってその調和を保っているのではないかということである。不完全なのだがそれによって完全性がもたらされているのがこ

---

の宇宙の姿なのかもしれない。そうなってくると、逸脱者やバグを排除しようとする今の社会のあり方はどこかおかしなものに見える。

もちろん、社会道徳的な観点から更生すべき逸脱者やバグに対してはしかるべき処置をしていく必要があるが、今の世の中は、逸脱者やバグであれば何でもかんでも排斥するような動きがあるように思えてならない。それをしてしまうと、この宇宙の調和は保たれなくなってしまうのではないかと思う。この点もまた、マイノリティーと多様性の話ともつながってくるだろう。

一昨日より、2018年に訪れたアイノラのシベリウス博物館で購入した文献資料を夜に眺めている。その中で、シベリウスが若かりし頃に10年の月日をかけて、過去の様々な偉大な作曲家の作曲技法を習得していったことを知った。自分もまたそれぐらいの時間をかけることを念頭において、多様な作曲語法を習得していこうと思う。その過程で、徐々に自分の作曲語法を彫琢していく。

音楽言語もまた言葉であり、まさにそれは言語に他ならないのであるから、自然言語における文体をゆっくりと育てていったのと同じように、音楽言語の文体もゆっくりと育てていこう。文体は自分の成熟度合いが歴然として反映されるため、文体を育てということは自己を育てることに他ならない。そしてこれは、絵画における象徴言語の文体においても当てはまることだろう。つまるところ、創作活動における全ての文体は自己の成熟と密接に関係しているのだ。言い換えれば、文体に自己の成熟の度合いが滲み出て、文体は自己の成熟の証だと言えるだろう。フローニンゲン:2020/8/21(金)

06:41

### 6137. 迷宮を舞台にした今朝方の夢

時刻は午前6時半を迎えた。辺りは依然として静かであり、秋の心地良い風が吹いている。空は少しばかり曇っているが、嫌な雰囲気ではない。今日は小鳥たちも休憩をしているのか、彼らの鳴き声は聞こえてこない。

それでは今朝方の夢について振り返り、その後創作活動と読書に励んでいきたい。今日は午後1件ほどオンラインミーティングがあるだけなので、それ以外の時間は全て自分の取り組みに当てていこう。

---

夢の中で私は、迷宮のような学校の中にいた。建物の雰囲気はとてもモダンであり、校内にはレストランや研修ルームを含めて、いろいろな施設があった。私は迷宮のように入り組んだ構内をあてもなく歩いていた。建物の2階のフロアを歩いていると、外に出られるドアがあったので、それを開けてみた。

すると、城のようなその建物の外に出ることができ、城の2階の外側を歩く通路が目の前にあった。空を見ると、空には白い雲がちらほらあったが、概ね快晴であり、気温は秋のそれだった。その通路を歩いて一周しようと思った時に、後ろから誰かがやってくる気配があった。振り返ると、中学校時代の部活の後輩たちだった。先頭にいたのは、1学年下の代のキャプテンを務めていた後輩だった。彼と目が合って、挨拶がてら少し話をした。どうやら彼らはこれからその通路の先にあるレストランで昼食を食べるとのことだった。

その通路の先にレストランなどあるのかと私は驚いたが、話を聞いてみると、城壁をぐるりと回ったところにレストランがあるとのことであり、360度回った場所、つまり今開けたドアのところにレストランがあるとのことだった。私はドアを開けてすぐに右に向かって歩き出したので、左の方を一切見ていなかった。そこでドアから見て左の方を見ると、確かにそこにレストランがあって、ウェイトアの女性が笑顔でその場に佇んでいた。

後輩たちにランチを楽しんでくれと伝え、私はその場を後にした。すると私の体は城の中のどこかに瞬間移動した。今度は1階にいるようだった。1階は、自分が実際に通っていた中学校と作りが同じだった。放送室の位置や職員室の位置、そして玄関の雰囲気が全く同じだった。

職員室につながる玄関の前に私は立っていた。するとそこで、部活の顧問の先生が、2馬力のボートを地上を走らせてやって来た。先生のボートは、父が持っているボートと同じ馬力で走るものであり、デザインがスポーツカーのようにおしゃれだったので、先生とその場で少しボートの話をした。話がひと段落すると、先生は職員室の中に入っていこうとし、その姿を見て、そういえば自分も他の先生に用事があったのだと思い出した。

そこは中学校のはずだったが、なぜか私が小学校6年生の時に世話になっていた担任の先生も職員室にいて、先生にあることについて抗議しに行こうと思っていたことを思い出した。端的には、

---

先生が作った分厚いハードカバーの書籍の中に、自分に関する記述があって、その内容が大いに間違っていたのである。それだけではなく、その内容は自分を中傷するような内容だったのだ。

職員室に入った私は、その時すでに反抗心に満ちていて、その分厚い書籍を壁に叩きつけたり、膝で真っ二つにしようとしていたりしていた。そして最後は、書籍を地面に叩きつけた。ところが、いずれの行動も先生たちの目に入っていなかったのか、私に話しかけてくる先生や注意をしてくる先生はいなかった。担任の先生が座っている机まで行くと、先日の模擬試験の結果が返ってきたらしく、それについて話をしようと先生が持ちかけてきた。先生は私の表情や気配から何かを察して、「個室に行こうか？」と持ちかけて来たので、そうしてもらうことにした。

個室に入ると、同じ学年の女性友達の2人が後ろから部屋に入って来た。女性友達が入ってきたことにより、彼女たちの前で先生に激しく抗議するのはどうかと思い、少し冷静になった。先生は私に、模擬試験の受講料をその場で支払った際に使ったクレジットカードを返して来た。見ると、カードがひび割れていた。そのカードは最近新しく手に入れたばかりだったので、また新しいカードを発行しなければいけないのかとショックに思い、先生に事情を問いただした。

今朝方のこの夢は、同じ城の中でもう少し場面があったように思う。入り組んだ階段を降りている場面があり、階段の上から各フロアのセミナールームのような部屋にいる人たちの姿を眺めていたことを思い出した。またその他にも、小中学校時代の友人の数名と遭遇し、彼らとも個別個別に話をしていたのを覚えている。確かテニス部に所属していた親友(YU)と野球部に所属していた2人の友人(RS & YK)と話をしていたのを覚えている。フローニンゲン:2020/8/21(金)07:03

### 6138. 瞑想・祈りの時間としての入浴

時刻は午後7時半に近づきつつある。今日は午前中から天気が良くなり、気温も29度ほどまで上がった。秋の入り口に入り、そこから再び夏の方に戻ろうとしたのかもしれない。明日からはもう今日のように気温が上がることはなく、最高気温は21度までしか上がらない。明日は雨が降るようだが、午後に散歩がてら街の中心部に出かけ、革製品専門店で財布を購入しようと思う。その帰りに、Holland & Barrettに立ち寄ってヘンプパウダーを2つほど購入し、Ekoplazaでいつものようにオーガニック食材を購入する。

---

明後日は、午後にでも時間を取って、書籍の一括注文を行いたい。それらの書籍は来月に届くことになるだろう。来月はそれらの書籍をもとに、音楽に関する美学(音楽美学)、環境経済学と現代貨幣論、シュタイナーの社会経済思想を中心に探究していく。9月に書籍を注文してしまうと、秋の一時帰国の時までには書籍が受け取れないものもあるかもしれないので、日曜日は2ヶ月分の書籍をまとめて購入しよう。随分と数が増えそうだが、今の自分の探究熱がそれを欲している。このところは毎日1、2冊書籍を読んでいる。それでいて創作活動にも十分に時間を充てられていることはとても喜ぶべきことだ。

今日の入浴中にふと、入浴の時間は自分にとって心底寛いだ状態で行う瞑想実践の時間であり、同時に祈りの時間でもあることに気づいた。浴槽にゆったりと浸かっていると、自然と脳波がリラックスした状態になり、瞑想を行っているのと同じ状態になる。そこから私は遠隔ヒーリングを家族や知人に対して行っているのだが、その時間は彼らの健康状態がもっと良くなり、エネルギーに溢れるようにと祈る時間でもある。瞑想と祈りとしての入浴。それを明日からも大切にしていこう。

午前中に、より立体的な絵やだまし絵を描いてみようとしたところ、それらを描くためには理論に沿って大いに思考を働かせて描く必要があり、とても窮屈に感じた。描き終えた後に、自発的に絵を描いた時に感じるいつもの浄化感がないのだ。内側の感覚が望んでいないようなものを書いてしまうと、そこには違和感が残ることに改めて気づいた。今後も思うままに筆を動かしていき、自己の本質が喜ぶように絵を描いていこう。

とはいえ、技術的な知識も得ておくと表現の幅が増えるだろうから、Courseraなどを通じて絵画制作のオンラインコースをいくつか視聴してみようと思った。しかしながら、あまり良いものはなく、結局受講はやめた。自分の好きな画家からインスピレーションを受けて絵を描くことはあったとしても、何か小手先の技術を学ぶために窮屈なトレーニングを積むことはやめにしておこうと思う。本当に自分が技術の習得を望む日がきたら、その時にそうしたトレーニングをすればいい。

その時にも、題材は常に自分の内側の感覚とし、何か与えられたお題に対して絵を描かないようにしていこう。そのような形であれば技術の幅を広げながらにして、同時に自己の本質を喜ばせることができるだろう。創作活動は、常に自己の本質を喜ばせるものにする。フローニンゲン:2020/8/21  
(金)19:35



時刻は午後8時を迎えた。いつものように、先ほど必要なメールに返信をした。いつもメールは基本的に夕食を食べて少ししてから確認するようにしている。起床から夕食を食べ終えるまでは集中力を削いでしまうメールの確認はしないことを徹底している。

メールをするために生まれてきたわけではなく、メールの返信に時間を割くために自分の貴重な人生の時間があるわけではない。朝から晩までメールを見ないことによって、どれだけ自分の活動に集中できることか。

一昔前までは昼にメールを確認するようにしていたが、今はそれすらもしていない。さらに昔であれば、朝にメールを確認していたが、それによってどれだけ気を取られてしまっていたことだろう。自分の取り組みに対する集中力と生産性は、その時と今とでは比べ物にならない。

今日は日中に気温が随分と上がったが、この時間になるともう随分と涼しい。今日は秋の入り口からほんの少し夏に戻った感じであったが、今日をもって夏が完全に終わりを告げたように思う。

ここ最近では毎日、スクリヤービンとシベリウスを参考に曲の原型モデルを作っている。2人に共通していたのは、音に色を見るという共感覚の能力だ。スクリヤービンがそうした能力を持っていたことについてはすでに知っていたが、シベリウスがそうした能力を持っていたことについてはアイノラで購入した資料に目を通していた時に気づいた。この資料の中で、シベリウスが自宅の庭で取れた果物や野菜を食べており、とても健康的な食生活を送っていたことを知った。実際にシベリウス博物館に訪れた時に見たサウナ小屋で、シベリウスは毎日欠かさずにサウナに入っていたそうであり、これもシベリウスの健康を促進し、彼は作曲家の中ではかなり長生きしたのもそれらのおかげなのかもしれないと思った。

今日は午後、社会環境や時代精神に応じて音楽が果たす役割も変遷していることについて考えていた。もちろん普遍的な役割もあるだろうが、今の時代に求められる音楽はどういったものなのかについて考えていた。1つとして、霊性の復権と涵養を促す音楽が求められているように個人的には思う。その役割を果たす音楽を作っていくことはできないだろうか。

---

絵画への関心も強くあるが、とりわけ音楽が果たす社会的な役割を考察したいと思い、ライデン大学が提供しているMOOCの“The Importance and Power of Music in our Society”を視聴することにした。このコースはまだ始まったばかりであり、早速動画を見始めたところ、今現在提供されている動画をすでに全部見てしまった。続きの動画がアップされることが今から楽しみだ。

プラトンは、音楽が道徳意識に与える影響について考察をしていた。孔子もまた然りである。過去の偉大な思想家が音楽の果たす役割について考えていたことは興味深い。明後日に大量注文する書籍の中には、芸術が社会に果たす役割について言及した書籍も数冊ほどある。そのテーマについてこれから考察を深めていきたい。フローニンゲン:2020/8/21(金)20:20

#### 6140. 公私について/制約と不在の不在化

時刻は午前6時半を迎えた。今週もあつという間に平日が終わり、今日から土曜日である。フローニンゲンはめっきり秋の気候となり、昨日は幾分気温が上がったが、今日からはもう最高気温が20度前後となる。気温が上がっても21度までしかいかない。

今日は午前中から午後にかけて小雨が降るようだが、計画通り、夕方あたりに街の中心部に行き、買い物をしたいと思う。散歩やヨガなどの身体実践、食実践、入浴と睡眠。それらが日々の良好なリズムを作り、人生を実りあるものにしてきている。

昨日もまた雑多なことを考えていた。1つには、公私に関しても、未分化の状態から分化の状態へ至り、そこから今度は統合化に至るプロセスがあることについて考えていた。

現在の自分は、公私の分化を終え、両者には固有の差異があることを認識ながらにしてそれらを統合しているプロセスにあるようだ。そのような公私観をもとに、実際にそのような生活を送っている。公私の境目がないという人は、両者のベン図の重なっている領域は見えているのだろうが、一方で両者に固有の領域は見えていないのだろう。公私が完全に分かれてしまっているという人は、逆にベン図の重なっている領域が見えないのだろう。

2つ目としては、マルクスが資本論の中で、私たちの生活がある段階から次の段階に移行すると、そこではまた異なる法則による統制が始まる、という趣旨のことを述べており、それについて考えてい

---

た。それは個人と社会の発達の原理そのものである。個人も社会も、新たな段階に移行することは、新たな制約が課せられることを意味する。現代の社会を覆う種々の制約に思いを馳せる。個人の制約は、社会の制約から大きな影響を受けている。社会の制約に気づくこと。それはロイ・バスカーの言葉で言えば、不在の不在化に他ならない。

不在の不在化を絶えず行っていくこと。それが社会変革には不可欠であり、制約もまた存在論的には無限の階層構造を持っているがゆえに、社会が次の発達段階に移行すると、そこではまた新たな制約が出現する。個人も社会も絶えず制約と向き合っていくことが要求されており、それは原理上不可避なのだ。制約を乗り越えていくための解決手段もまた不在の不在化を通じて見えてくる。不在の不在化を通じて制約に気づき、解決手段を見出していくこと。それが漸進的な解放をもたらしていく。

ふと、かかりつけの美容師かつ友人のメルヴィンが以前述べていたことを思い出した。それはオランダ語と英語の相互作用に関する話である。いや、その時の話は一方向的な作用だったように思うが、2つの言語はきつと目には見えないところでお互いに影響を与え合っているのだろう。ただし、やはりメルヴィンの言うように、英語の影響を受けて、毎年新しいオランダ語が誕生しているらしく、英語からもたらされる影響は強いようだ。新しい言葉が生み出されることもまた言語の発達の一側面だろうが、同時に弱体化を招く危険性もあることを考えていた。日本語もまた英語に強く影響を受けており、毎年新たなカタカナ英語が無数に誕生している。自分の日々の読書もほぼ全て英語であり、そう考えてみると、自分自身も相当に英語の影響を受けていることがわかる。フローニンゲン：2020/8/22(土)06:49